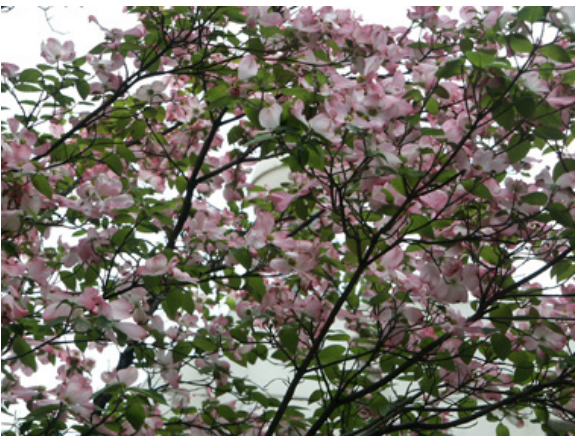


ツクシのおひたしとトルクメニスタンの貫頭衣服

ついこの間まで、緑といえば、冬の弱い日差しと寒さでくすんだ濃い緑のクスノキ（楠）だけだった。その麻布十番が、いまは新緑でまばゆい。いつせいにハナミズキ（花水木）やカツラ（桂）などの街路樹が芽を吹き、日に日に緑を増やしている。ま



だ樹が若いだけに
本当に成長が早い。
歩道が洒落た煉瓦しやれ
で敷き詰められて
見違えたからかも
しれない。昨年より
もはるかに緑が多
い気がする。

急に暖かくなって、ハナミズキは白や薄ピンクの花を戸惑いがちに咲かせている。カツラは可愛らしいハート型の葉っぱをたくさんつけてキラキラと光らせている。パティオ広場のケヤキ（棒）は小さなギザギザのある葉をつけた枝を大空にグイグイと伸ばしている。トチノキ（栃）は大きな葉をいまにも広げようとしている。ハティオ広場から十番商店街に抜ける道の両側では大きなカエデのような葉をつけるモミジバフウ（紅葉楓）が息を吹き加えている。

千鳥ヶ淵や青山墓地の桜が綺麗だなどと話していたのに、あつという間に葉桜になって、もう街路樹が若葉の協奏曲を賑やかに奏でる季節である。

久しぶりに地下鉄に乗って出かけたところ、タブロイド版の「メトロお花見ガイド」（平成十年四月一日発行）というのが駅に置いてあった。早速、二郎もらつて見たら、都心のおすすめ花見コースが二つ載っていた。

●千鳥ヶ淵から出発し、お堀に沿ってソメイヨシノ（染井吉野）や濃いピンクや白い花の八重桜などの桜並木を楽しみながら桜田門から日比谷にでて、日比谷公園の桜を堪能したあと、虎ノ門から百五十本のソメイヨシノに囲まれるアークヒルズへ出るルート

●靖国神社から出発し、市ヶ谷から桜並木の続く外濠公園そとぼりこうえんを通って四ツ谷に抜け、新宿通りを少し皇居方向に戻って紀尾井町から清水谷公園とホテルニューオータニの間の桜並木を歩きながら弁慶橋へ出るルート

いずれも僕が気情らしに車をときどき走らせる都心の散策道である。これにソメイヨシノ、八重桜、しだれ桜など様々なサクラを楽しめる千鳥ヶ淵から濠に沿って科学技術館にまで抜けるルート、しだれ桜の大木を見ることができる神宮の絵函館周辺、それと青山墓地の真ん中を突っ切っている石畳の参道のソメイヨシノのトンネルで花吹雪を味わうルートを加えれば、ほぼ東京の中心部の花見ガイドとしては完璧だろう。

もつとも都心の見物は桜ばかりではない。思いの外に街路樹の緑がゆたかたか、見応えがある。いまの街路樹は、一九〇七年（明治四十年）に、成育状況などを考慮し、イチヨウ（銀杏）、スズカケノキ（鈴懸木・プラタナス）、ユリノキ（百合木）、アオギリ（青桐）、トチノキ、トウカエデ（唐楓）、エンジュ（槐）、ミズキ（水木）、トネリコ（上欄利古）、アカメガシワ（赤芽柏）の十種類の樹が選定され、植えられたのが基礎になっているという。それからイヌエンジュ、シダレヤナギ（枝垂柳）、ソメイヨシノ、ミツデカエデ（三千楓）が追加され、ミズキ、アカメガシワは成績不良で廃止されたという。ちなみに銀座のといえはヤナギだが、初めに植えられたのはサクラとクロマツだったという。

一九七七年（昭和五十二年）の調査によると、東京都二十三区内の街路樹の総本数は十五万五千本にも達するという。三多摩地区は五万千本で、その三倍以上である。数が多いのはイチヨウ、プラタナス、トウカエデ、シダレヤナギ、エンジュ、サクラ、

ケヤキの順だという（「日本大百科全書」小学館）。

そういえば都心で、まだツクシも採れる。ツクシ——土筆とも筆頭菜とも書く。地下茎で増えるシダ植物のスギナ（杉菜）の地下茎の節から出てくる胞子を作るための特別な茎である。枝はまったくなく、節のところに「はかま」と呼ばれる小さな葉がぐるりとついているだけである。全体に淡褐色で、先端には松かさ状の胞子囊の穂がついている。「はかま」は、やや使く口当たりの悪いので、これを取り除いて、おひたしなどにして食べる。



子供のころは、春になると、いつもは悪ガキどもが殊勝しゅしょうにも巡れ立って、ツクシを採りに行ったものである。「はかま」をとって、熱湯でさつとあく抜きしてから、胡麻や辛子であえたり、煮物、おひたしにして食べた。でも、僕は決して旨いとは思わなかった。珍しさもあつたけれど、「季節のものを食べると身体にいいよ」と言われて、葉だと思つて食べた記憶しかない。

それでも、みんなでツクシを探して採るのは面白かった。それに採つて帰ると、いつもは帰りが遅いなどと悠つている大人たちが、春の味覚だといつて喜ぶ姿も嬉しく、頃合いを見計らつてツクシ採りに出かけた。大きくなると硬くて苦みも強くて食べられない。採りごろがある。うっかりしていると、採れる場所は秘密なのに、別の悪ガキどもに先に採られてしまう。ときどきソツと様子を見に行かなければいけない。うまく出し抜いて、たくさんのお獲物のツクシをみんなで分配するときのワクワクした気持ちはいまも忘れられない。

「やあ、珍しい。ツクシじゃないか。これどこで採つたの」

そのツクシに予想外のところで出会つて思わず叫んでしまった。二十年以上も前、

二年間ほど一緒に仕事をし、それ以来、何かという逢っている友人から、たまには自分の巣で飲まないかという誘いがあった。それで、地図を頼りに出かけた赤坂の小料理屋でのことである。

彼が来るのを待っている間に女将と話した。「近くの空き地で採ったの」と赤坂六丁目にあるカウンターだけの小さな小料理屋の女将はいう。聞けば、ここに店を開いて二十年あまりになるけれど、バブルの崩壊で放置された、あっちこっちの空き地で、ツクシが芽を出すようになったという。僕の本籍は、まだすぐ隣の赤坂五丁目に残っているし、懐かしいことこの上ない。すっかり忘れていた、しゃがみ込んでツクシを採ったときに立ちこめてくる早春の上の匂いと、ムツとくる草いきれを思い出した。

坂を下って麻布十番を経由して六本木トンネルをくぐり、青山通りへ出る。それから豊川稲荷の先を左折し、横道からニューオータニの正面玄関の前に出て、上智大学の裏手の道を抜けて新宿通りに入る。そこで左折し、さらにすぐにまた左折し、一方通行の道を道む。突き当たったところは市ヶ谷に抜ける道である。靖国通りに平行して走る裏通りである。もどりは靖国通りへ出て、市ヶ谷の駅前を左折し、すぐに右折して外濠の土手沿いを走る。すると四谷駅の横に出る。そこで新宿通りを横切って、さらに土手沿いに上智大学正門前を通り、ニューオータニの正面玄関に出る。そこからは気分によつては弁慶橋の方に抜け、青山通りを渋谷方面に走り、神宮外苑を回ったり、青山墓地を抜けたりする。

緑ゆたかな都心でも、もつとも街路樹を楽しめるルートである。都心に居ながらにして、四季の移り変わりを存分に堪能できるところである。それが僕の鍼治療に通うルートでもある。効果は申し分ないけれど、耐えるのに、相当の気力を必要とする針治療に通うルートである。

でも、今日は鍼治療ではない。天気は良いし、気分も浮き浮きする。つい先日、走ったばかりなのに、一段と新緑がまばゆい。

「見て！ あの真つ赤な花すごいだろう。それでこの道を来たんだけど」

「わあ！ ホントにきれい！」

「あれ何という樹なんだろう」

「えーと、えーと、大きすぎる気がするけれど、シyakunaゲじゃないかしら」

「シyakunaゲ？」

「あんなに大きくないけれど、庭に咲いている。それとそっくりなもの……」

「そうか！ 言われてみれば、シyakunaゲみたいだ。シyakunaゲに違いない」

「ねえ見て！ 土手のところ。あんなに花がたくさん咲いている！・」

「やっぱり、このあたりはきれいなね」

そんなやりとりをしている間に、車は青山通りを走って表参道のところをで右折し、根津美術館に向かう道を走っていた。ちよつと気張って「キハチ」で昼飯をとることにしたからだ。予約しないとなかなか席がとれないのだが、カウンターに座れた。思わず心の中で「ラッキー」と叫んでしまった。それから買い物をして、六本木トネルを抜け、いつもの麻布十番の骨董屋の喫茶店に入った。窓越しに見えるケヤキは光をいっぱい浴びて輝いる。久しぶりにモヤモヤの晴れた一日だった。

それにしても今週はいろいろなことが続いた。しばらく逢っていない作家の杉田望に電話を入れた。僕の身体のことを心配していたし、もうそろそろ小説を書き終えるところである。案の定、ちょうど脱稿したところで、少し気晴らしをしたいという。麻布十番で落ち合って、一杯やろうということになった。

「定食屋や鍋屋じゃ嫌だなあ。ゴチャゴチャしていないところがいいなあ」

「じゃ、沢たまき風の女将のところにもする？」

「……あそこ、一人いくらいかかる？」

「いいよ、気にしなくて。今日は先生の脱稿祝いでおごるよ」

待ち合わせは、いつもの十番温泉前の喫茶店である。新聞に読み耽ふけっていたら、前に立つ人の気配がした。目を上げたら杉田がニツと笑って悠然ゆうぜんと立っていた。派手な

幾何学文様の貫頭衣をまもつてヌツと立っていた。僕が座っていて、杉田が立っていたこともあるが、それだけとは思えない。一七〇センチない杉田がやけに大男に見えた。

「なに、モの格好」

反射的に僕は叫んだ。明らかに動転していた。それがいけなかった。杉田は得意の絶頂だ。ひっくりかえるのでないかとハラハラするほどのけぞった。こうなったら、もう駄目だ。素直に聞くしかない。おそろおそろ訊ねた。

「それ、やつぱり中国のもの」

「いいや——トルクメニスタンのものだ」

「トルクメニスタン？」

「そう、トルクメニスタン」

ゆつたりとしたトルクメニスタンの貫頭衣のなせるワザか、話し方もおおようである。そう言えば杉田はだいぶ前から中央アジアを舞台にした石油絡みの小説に取り組んでいた。やれカザフスタンだ、キルギスタンだ、と、何々スタンという名前が盛んに杉田の口から出ていた。聞けば、その小説の取材の関係で手に入れたのだという。通りすがりの人たちが好奇心を丸出しにするなかで、ますます杉田は泰然自若たいぜんじじやくの雰囲気きふいで歩く。それでなくとも二人ともが、職業不明の、なんとなく目立つ出で立ちだけに気になって仕方がない。

たまらなくなつて、近くの店に飛び込むことに決めた。麻布十番の商店街通りに面した二階にある、この四月に開店したばかりの宮崎県の郷土料理を売り物にする店である。開店当日に飛び込んだのが運の尽きで、それ以来、なんだかんだと足繁く通っている。酒と酒の肴さかなはともかく、ご飯ものが、麦メシに冷たい味噌汁をかけた「冷や汁」——子供のころ、やつてはいけないと注意された、いわゆる「ネコメシ」である——それしかないのが玉にキズだが、便が良いので、ついつい入ってしまう。今週も昨日きたばかりだった。

まだ時間が早くて客はほとんどいない。で、奥の座敷に陣取って、鯉のたたき、ホテルイカの沖漬け、冷やしトマトなどを肴に、「浦霞^{うらかすみ}」で乾杯とあいなつた。

「ここなら落ち着く」と杉田はしごくご満悦である。「印税が入ったら、おごつて」
「おごるてば」で始まり、久しぶりなこともあって、話は弾むというか、四方八方、支離滅裂に飛び回り、陶器製のコップで杯を重ねた。

「お皿にこぼれるようにつがなくなっちゃあー」などと願っていた杉田も、「ずっと三時間ぐらいいしか寝なかつたので、さすがに参った」と音をあげ始めた。もう店は客でいっぱいになっていた。そろそろ引き上げ時である。「お勘定」と叫んで、立ち上がり、靴を履いて、ひよつとカウンターを見上げたら、見慣れた男が、両手に花で、顔を真っ赤にして話していた。高野孟である。もう目はトロンとしていて、テレビで見せる凄みはない。

「なんだ！」

「アレ！」

「なにやってんだ！」

ひとしきり奇声が飛び交った。高野の連れだと思った「両手の花」は、カウンターに座つたら話しかけてきた客だつた。さすがに顔の売れている高野ならではのこである。そうとわかれば話は簡単である。たまたま空いた近くのテーブルに三人は座り込んでしまった。

「こいつは本当に絶品だ」と、高野はよろけながら「百年の孤独」を持ってきた。前に高野が一本持つてきた焼酎だ。旨いと感じし、どこで手に入れたのだと聞いたら、もつともらしいことを言つてはぐらかしたけれど、何のことはない、この店で知つて、手に入れたらしい。

高野はオンザロックの「百年の孤独」を片手に、「これ、これ、これでなくちゃ——」と叫ぶ。もう相当に酔耐している。それではということ、 「百年の孤独」を祝し、百年も孤独じゃたまらないと思いつながら、その「孤独」のオンザロックを片手に「乾杯」と叫んだ。

「あれ、それ中央アジアの服？」 「トルクメニスタンのヤツじゃない？」 さすがに高野である。酔っぱらっていながらも杉田の着ているものをただちに言い当てた。そういう高野も、気がつけば、奇妙な服を着ている。

藍染めの作務衣さむえのような服で、見慣れない文様の刺繍ししゅうが縫いつけられている。タイで買ってきたもので、文様はタイ北部の、麻葉で有名な「ゴールデン・トライアングル」の少数民族のものだという。布は大麻の繊維を織ったものだと言っている。

ところが、悔しいことに、それがなかなか洒落っていて、様になっている。よりによって、高野も杉田も、本当に妙なものを手に入れて着ている。しかも、それを見て、僕も欲しくなるのだから始末に悪い。

「いいな——」

「いいだろう」

「高いんだろう」

「高いぞ——」

もう三人とも相当に崩れている。その側を通る客が高野に声をかける。何を言っているのかよく分からない。でも、それらに高野は酔っぱらいながらも愛想良く答える。

「タレントは違う」と感心して見ていたら、ついに杉田が「もう駄目だ」とテーブルにしがみついた。せつかくの貫頭衣がもうぐずぐずである。一方、高野は「さあ、明日はテレビだ」と唐突に叫びだし、よろよろと立ち上がる。もう、いい加減にお開きである。

階段を下りて歩道に立ったところで、「それじゃー」と手をあげて別れた。二人とも大丈夫かなあ、と思つて振り返ると、やや前かがみの杉田と、その横をあやしげな足取りでジグザグに歩く高野が目に入った。手を上げてタクシーを止めようとしている。それを見て、まあ、大丈夫だろう、と二人とは反対の方向に歩き出した。

そんな様子の二人の後ろ姿を眺めたら、途端に、「そんなものション便がかかつているに決まっている」赤坂で採れたツクシの話をしたときの杉田の言葉が浮かんできた。「そのツクシにはション便がかかつているぞ」——子供の頃、ツクシを採りながら、よく言い合ったことも思い出した。

（一九九八年春 伴 友貴）